

民話にみる地球環境

松谷 みよ子

地球環境と民話という題をいただいたとき、まず浮かんだのは『古事記』に残る国生みのくだりでした。

「是に天つ神 諸の命以ちて伊邪那岐の命、伊邪那美の命、二柱の神に「是の多陀用磐流國を修め理り固め成せ」と詔りて、天の沼矛^{ヌボコ}を贈ひて、言依さし賜ひき。」

天つ神の命を受けて、イザナギとイザナミは天の浮橋に立ち、沼矛を指し下して塩ごおろこおろとかきまとると、引き上げた矛の先からしたたり落ちた塩が重なり積もって糸となりました。この糸に天降り天の御柱を立て、イザナギ、イザナミがかかるかのように天降りました。その「汝が身は如何に成れる」という美しい契りの言葉を交わして、つぎつぎと島を生むのです。

そして、もう一つ、心に浮かぶのは、沖縄のアーマンチュームが天と地を分けた神話です。

「はるか昔、天と地はまだ分れたばかりで、人間はせまい隙間を這いまわっていた。そのころ沖縄にアーマンチュームという巨人神がいた。アーマンチュームはこのままではいけないと、

固い岩場をさがし、両足をふんばり両手で天を支え、ぐーっと天を持ち上げてとーんと放した。天ははるかかなたに上り、人びとは歎声をあげ立ち上って歩きはじめた。岩には今もアーマンチュームの足跡が残っているといふ。

私は古事記に残る天皇家の神話と、沖縄に残るアーマンチュームの伝説は、天の高みから下界を見下しての国生みと、人びとと共に地を這いずりまわるなかで、満身の力をこめて天を大地から切り離した国生みと、その視点の違いを感じとらずにはいられません。

ここで思い至るのは、地方神話の雄大な世界です。東北に残る「赤神と黒神」を御紹介しましょう。

「はるか昔、十和田湖にひとりの女神がすんでいた。その美しさは照る日も曇らすほどだった。女神はくる日もくる日も機を織り、透きとおった声でうたつた。さて、秋田の男鹿半島には鹿の群を追つて赤神がすんでいた。ある日赤神は女神の歌をきき、笛をふきならしながら女神を訪れた。女神を恋うようになつた赤神は、十和田を訪ねる日が多くなつた。

さて、青森の竜飛には猛々しい黒神がいた。黒神もまた女神を恋い、竜を飛ばし、海のものをかついで女神を訪れた。女神は悩んだ。あるときはやさしい赤神に心ひかれ、あるときは雄々しい黒神に心ひかれ、機を織る手も進まず、思わず涙を落とすと、十和田の山鳩もいつせいにほろほろと鳴いたという。

やがて、赤神と黒神とが女神をめぐつて戦う日がきた。この

とき、みちのくの神々は津軽の岩木山に集つて足を踏みならし、赤神方と黒神方にわかれて応援した。そのため岩木山の右肩は踏み崩されて低くなつたといふ。

戦いは黒神の勝利に終つた。負けた赤神は野を血で染めながら男鹿の岬にのがれて身をかくした。勝つた黒神は、女神を妻に迎えようと十和田湖へ歩みよつた。しかし女神の姿はなかつた。女神は負けた赤神がかわいいといって、男鹿へ赤神を追つていつたのである。

黒神は戦さには勝つたが、女神を失つた。足どりも重く、津軽へ引上げた。そうして竜飛岬にどつかと腰をおろし、ふかいふかい溜息をついた。その溜息があまりに大きかつたので大地はめりめりと裂けた。このときから津軽と蝦夷は離れたという。裂目に海の水が流れ込んで出来たのが津軽海峡である。

いつたい誰が、北の大地をみはるかして、この雄大な伝説を語りはじめたのか、ただおどろくばかりです。

もう一つ、これもまた雄大な千葉に残る地方神話があります。「椿の湖」^{うみ}という物語です。

遠いはるかな昔、イザナギとイザナミがつぎつぎと島を生み、土を生み風の神を生んだころ、アシハラノナカツクニには、さまざまな国つ神が生まれ、災いの神も生まれた。

そのころ、背は高く目はほおずきのよう赤く、長い鼻のサルダヒコという神がいた。その神が何をおもつたか、ある日、

今^{カズサ} 上総と下総の境に、椿の木を一本ぱつたらと植えた。

それから八万八千年の歳月が経ち、椿の木はぐんぐんのびて、その梢はタカマガハラにとどくほど、その根は根の国の石垣にとどくほど、大木になつた。春には真赤な花のため天は真赤に、花が散れば地は赤く染まつた。その椿に、いつのころから魔王がすみはじめた。魔王は人やけものを引き裂き、病いをはびこらせ、人びとは恐れおののいた。

その有様をタケミカズチとイワイヌシの神がみて、兵をひきつれ雄叫びをあげて椿の木めがけて押し寄せた。おどろいた魔王は潮のよう軍勢にこれはかなわぬと、椿の木に抱きつき、えいやえいやと引き抜いた。その木を海に投げつけ、魔王は宙を飛んで木に飛び乗ると沖合遠く逃げ出した。

神々の軍勢は木を引き抜く勢いでおきな地震や、海になげこまれたときの滝のような水しぶきにばたばた倒れ、起き上がりたときには魔王の姿はどこにもなかつた。椿の木をひきぬいたあとは湖となつた。椿の湖^{うみ}という。やがてまた歳月が流れ、江戸時代になつて町人白井次郎右衛門らが命がけで干拓し、平野とした。干潟八万石とうたわれる米どころとなつた。

若い日、干潟を歩きながら友人からこの話を聞いたのが忘れられません。

さて、「天地創造」にまつわるいくつかの話を置きましたが、次に民話に見る「人間と自然との調和」について、いくつか考えてみたいと思います。

グリム童話のなかに〈なぞなぞばなし〉という題の話があります。

「魔法によつて花にされた嫁が、夫と夜をすごし、あけがた野原へ戻るとき夫にいふ。「夜明け前、野原にいらして花になつてゐる私をみつけて折りとつてくださいたら、魔法がとけて、私はこれからはずうとあなたのそばにいられてよ」そして、その通りになつた。さてここでなぞなぞ。他の花からどうして自分の嫁をみつけることができたのか。それは、夜の間は夫の許にいたから、その花にだけは夜露がおりていなかつたから。」

蛙の王子にしても、外国の民話ではおおかたが魔法によつて姿を変え、人間の許へやつてきます。妻となり夫となることで、魔法が解けるのです。しかし日本の民話では、鶴が、月見草が、鮭が、また猫が、それぞれ自然の精靈そのものの意志によつて嫁にしてほしいと訪ねてくるのです。そして姿を見られたとき去つていくのです。

何故なのか、浅学の私にはこの謎は解けないのですが、自然との共生があるように思うのです。ことに雪女のように、雪の精靈の嫁は、自然そのものの美しさと激しさ、きびしさが、さまざまだと感じられる話です。

このほか私は青森に伝わる「鬼と臍玉」^{（へちょうだま）}の話に人間と自然との関わりを感じます。これは屏風山^{（ひょうぶさん）}の鬼婆が昼なお暗い森をバクタラバクタラやってきて、泣いている子はいねかアと探

しまわるのですが、この鬼婆は、父と母が松前に出稼ぎにいつた留守を守る若い娘の麻糸の糸玉つくりを手伝つてもくれるのです。私はこの鬼婆に、天和二年、旧津軽藩主が十三から十六歳まで、南北三十キロ東西四キロ西風吹きさぶ砂山に植林してつくりあげた屏風山の深い森、そのものを感じるのです。盗伐には死罪を以てし、生首を肥料としてまで守つたというこの森によつて、土地はうるおい、新田が開かれました。その激しさとやさしさこそが、森の精靈としての鬼婆そのものではないでしょうか。

地球環境と民話。最後のくくりとして私は「破壊と再生」をあげたいと思います。いま自然がどれだけ破壊されているか、それは誰もが痛いほど肌で感じていると思います。会津に残る「坊さんに化けた岩魚」の話は、

「毒を流して魚をとろうとした木こりの前に、坊さんが現われ、やめるようにとさとす。やめるべと木こりはいいながら、坊さんに団子をふるまう。坊さんが去ると誰がやめるものかと木こりは毒を流し、魚を根だらしに獲る。大きな岩魚が浮び上がり出る。さてはさつきの坊さんはと顔を見合わせるうちに、木こり達はばたばたと死んでいった。」

昔も今も、川に毒を流すものはいたのです。北海道のアイヌに伝わる「ちいさなオキクルミ」の話は実に見事に水を空を汚す悪魔と神の子のオキクルミとの闘いを語っています。

「ちいさなオキクルミが川にそつて遊びにいくと、川には鮭たちがはしゃぎながらのぼつてくる。野原には鹿たちがはねまわっている。と、ふいに目の前に悪魔の子がとんと立つた。

「オキクルミ、遊ぼう」といつてクルミの木の弓にクルミの木の矢をつがえ、水源めがけておちこんだ。みる間に水源から濁つた毒水があふれ出し、鮭たちは泣きながら川下へ流されしていく。悪魔の子は手をたたいてよろこんだ。オキクルミは銀の弓に銀の矢をつがえて水源に打ち込むと、たちまち水源から清らかな水が流れ出し、鮭たちはよろこんでまた川をさかのぼりはじめた。悪魔の子は怒り天に向かつて毒の矢を射ると、天から毒の風がふきおろし、鹿たちを地上に連れ戻す。悪魔の子は「よし、力くらべだ」と上衣を脱ぎ捨て、オキクルミと組み合つたが、オキクルミは遂に悪魔の子を地獄へ投げ捨て、鹿たちが楽しげにはねまわるのをみながら家へに帰る。

とおい昔、水を大地を汚すものがすでにいたのでしょうか。何とも現代に通じる物語です。

現代の民話では福井県大野郡泉村の谷直右衛門じつさまが語つた公害を知らせにきた河童の話がある。九頭竜川の水が汚れている、とりかえてくれいと、しつこく村人に頼みにくる河童、村人には川の水が汚れているとは見えず河童にじやけんにする。河童は泣きながら山へ去つた。何年か経つてこの話を聞

いた学生が九頭竜川の水を汲んで県に調査を依頼、川の汚染が発見された。村人は山へ謝りにいったが、霧のおくから河童が「百年経つたら戻るさかい、川をきれいにしてくれ」と悲しくいう声が聞こえたという。

河童も水神の流れを汲むならば、公害の元である工場へ乗り込むくらいの力を發揮してほしいのですが、ただ告げにきただけというのが残念です。

(まつたに・みよこ／日本民話の会)